



第46回「おかねの作文」コンクール

温故知新を目指して

沖縄県・石垣市立石垣第二中学校 3年 平田 ころろ

今、私の着ている制服はお下がりです。もうすぐ中学生になると胸はずませていた冬に母の知人が

「大事に着ていたので、良かったら」

と愛しそうに譲ってくれました。とても丁寧にたたまれ型崩れや汚れもなく、生地も傷んでいません。すぐにサイズ直しをし、入学式から私の制服となりました。

肌触りの良い感触や着ているだけで不思議な安心感に包まれるお下がり。使っていた人の人格や大切にされていた温かさまでも心地良く伝わってくる気がします。私の家は、もったいないからと再利用の命を吹きこまれたものに溢れて^{あふ}います。弟のじんべいは父のハンチングに変身し、味噌作りの発酵包布は、私たち兄弟五人が使っていた布おしめで作りました。他にも色や形は変わったけれど毎日お世話になっているものばかりです。楽しい知恵で新しい役割を担うそれぞれもどこか誇らしげに見えてきます。

週末は靴と上履きをきれいにしますが、毎週洗っていてもかなり汚れていて、自分の足を守ってくれたありがたさに深く感謝します。「物を大切にするのは、人や自分、お金を大切にすることにつながる」と両親は教えてくれます。

昔はあたり前だったお古を着ることや壊れた物を修理して使うこと、そして手作りのものが、流行や飽食、過剰な豊かさで忘れられているとも話してくれます。

学校で、文具品が落ちていたり、タオルや体育着の忘れ物がいつまでも同じ場所で持ち主を待っていることがよくあります。そんな時、大切にしないことが恥ずかしいことではなくなっているようですごく切なくなります。

連日、大量に捨てられる給食の残飯や公共物への落書き、不法投棄も物やお金への敬意がなくなっているようで残念に思います。いつかその行き





着く先で、自分や周りの人を、ないがしろにしてしまうのではないかと不安さえ感じる時もあります。作り手の心が聴こえない使い捨ての環境で育つ現代。

私たちは物質的に満たされていますが、大切にすべきものをまだ理解していないのかも知れません。

「もったいない」と言うと「けち」とか「せこい」と返す人もいますが、使い慣れたものは私たちに生きた思い出を寄り添わせてくれます。手の届く所で必要とされている姿や思い入れのつまったものは生活を穏やかにしてくれます。私の家で活躍する電化製品や机は両親が独身の頃から使っているものがほとんどです。持ち主を支えるモノ、それを心からねぎらう時間は透明感があり、素晴らしい歴史です。

お金で買えないものも大切にしようとするのは自分や他人を大事にするのと同じ方向を向いていると思います。

私たち家族は毎朝、新聞配達をしているのですが、収入を得ることは本当に大変です。雨の日でも体調が悪くても取次店や読者に迷惑をかけてしまうため、休むことはできません。無事1ヶ月の給料がもらえた時は金額よりも充実感や達成感で嬉しくなり、また来月も頑張ろうという意欲が湧きます。受け身で与えられるものと、自分の手で獲得したものの違いは大きく、労働して得た金銭は使い方慎重になり無駄遣いはしたくなくなります。

お金の使い方には人間性がそのまま出てくると言います。

価値観は無限ですが、間違ったお金の使い方をすれば世界は乱れます。未来のために貯金をしたり、困っている方への寄付などは理想の使い方です。いたわりや思いやりの活きたお金には喜びや元気も重なります。日本人の美徳でもある「もったいない」。そんな優れた感性をもう一度振り返り無駄のない、工夫を心がけることができれば最高です。本当の美しさは全てを大切に暮らす人の心にあるはずです。社会を豊かで平和にする責任がある私たち。人やお金との関わりを通し、学びながら一瞬一瞬を輝かせ成長したいし、多くの人が幸せになれる方法も考え続けたいです。

